

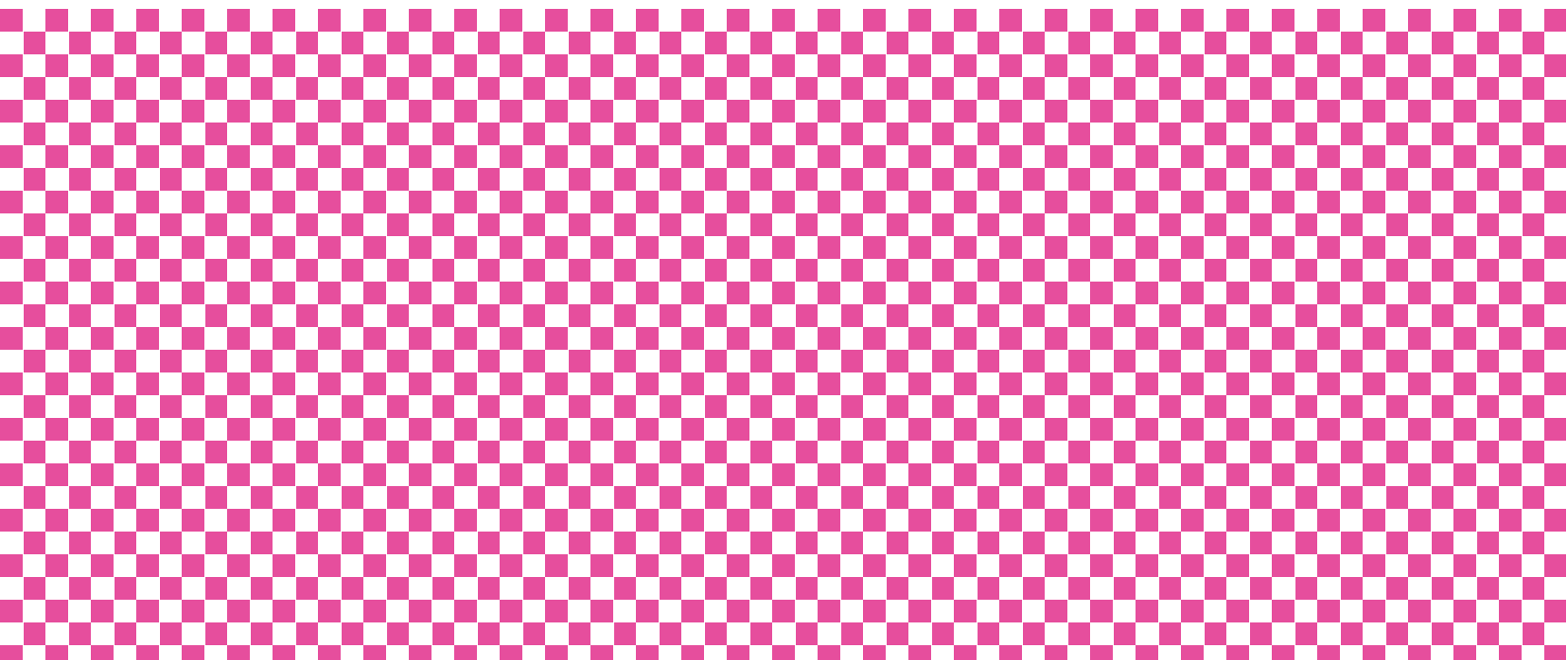
外国語を学ぶことの 意味

―日本語学習者の学びの姿から―

Izumimoto Chiharu

和泉元 千春

奈良教育大学 国際交流留学センター



外国語を学ぶことの意味

ー日本語学習者の学びの姿からー

奈良教育大学 国際交流留学センター 和泉元 千春

あなたは今、何か外国語を学んでいますか。日本で義務教育を受けた人なら、英語を学んだという人が多いと思います。英語の授業が楽しみで仕方なかった人、英語と聞いただけで逃げ出したくなる人、外国語を学ぶ人の気持ちは様々だと推察されます。では、あなたは何のために外国語を学んでいるのでしょうか。「その言語が話される国や文化に興味がある」、「その言語を使っているいろいろな人とコミュニケーションしたい」、「就職に有利だと聞く」、「入試科目に含まれている」など、その目的も多様でしょう。

私が専門としている日本語教育学は、狭義には日本語を母語としない人に外国語として日本語を教えることについて研究する分野です。世界で日本語を学ぶ学習者の姿から、外国語を学ぶことの意味を考えてみたいと思います。

1. 世界の中の日本語教育

世界ではどのような人が日本語を学んでいるのでしょうか。国際交流基金『2015年度海外日本語教育機関調査結果（速報値）¹』によると、136の国・地域にある16,167機関で3,651,715人が日本語を学んでいると言われています。地域別に見ると、最も学習者数が多いのは中国（953,283人）、そのあとインドネシア（745,125人）、韓国（556,237人）と続きます。残念ながら前回（2012年度）調査と比較すると、学校教育における英語志向の高まりと第二外国語軽視の影響を受け、学習者数は減少しましたが、上位3カ国（中国、インドネシア、韓国）を除くと学習者数は増加しています。上記の数値は、初等・中等・高等教育機関や日本語学校などの日本語教育機関に所属したり、特定のユーザーを対象としたインターネットサイトで学習をしたりしている者に限定されています。したがって、学習機会の選択が多岐に渡る現代においては、実際の日

¹ <http://www.jpfi.go.jp/j/about/press/2016/dl/2016-057-2.pdf>

本語学習者は、この数値よりもっと多いと考えられます。学習者の教育段階は中等教育が 52.1%と最も多く、高等教育が 27.5%、学校教育以外が 14.7%、初等教育が 5.7%となっており、中学・高校で日本語を学ぶ若い学習者が半数以上を占めています。

表 1. 学習者数上位 10 개국・地域の変化

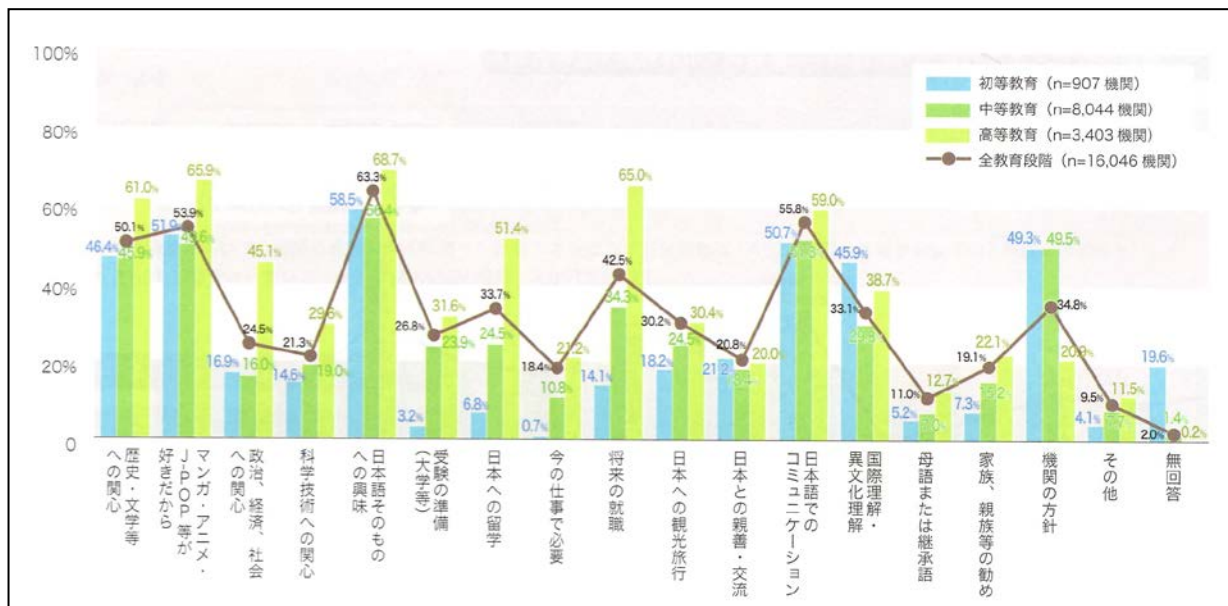
2012年度 順位	2015年度 順位	国・地域名	2012年度 学習者数(人)	2015年度 学習者数(人)	増減率(%)
1	1	中国	1,046,490	953,283	△8.9
2	2	インドネシア	872,411	745,125	△14.6
3	3	韓国	840,187	556,237	△33.8
4	4	オーストラリア	296,672	357,348	20.5
5	5	台湾	233,417	220,045	△5.7
7	6	タイ	129,616	173,817	34.1
6	7	米国	155,939	170,998	9.7
8	8	ベトナム	46,762	64,863	38.7
10	9	フィリピン	32,418	50,038	54.4
9	10	マレーシア	33,077	33,224	0.4

『2015 年度海外日本語教育機関調査結果 (速報値)』

では、彼らは何のために日本語を学んでいるのでしょうか。国際交流基金 2012 年度の日本語教育機関調査²によると、教育段階によって学習目的の傾向は異なっていますが、日本語学習の目的として最も回答が多かったのは「日本語そのものへの興味」(62.2%)でした。そのあと「日本語でのコミュニケーション」(55.5%)、「マンガ・アニメ・J-POP 等が好きだから」(54.0%)、「歴史・文学等への関心」(49.7%)が続きます。「将来の就職」(42.3%)や、「日本への留学」(34.0%)といった実利的な目的より、日本や日本語に対する興味が上回っているのが特徴です。また、日本のポップカルチャーが日本語学習のきっかけとなっている点もインターネットの普及等によるグローバルな情報社会ならではの傾向であると言えるでしょう。日本語学習者のこのような状況を見ても分かるように、外国語としての日本語学習の文脈に限らず、私たちが外国語や外国の文化に出会い、外国語を学ぶ機会はますます特別なことではなくなってきています。

² 国際交流基金『海外の日本語教育の現状 2012 年度日本語教育機関調査より』くろしお出版, p.17

表2. 教育段階別日本語学習の目的（初等教育・中等教育・高等教育）



『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』

2. 外国語学習の目標と言語教育観

2-1. 普遍的な言語規範の獲得を重視した外国語学習

あなたは外国語学習を行う際、何か目標を立てていますか。日本語を学ぶ学習者にこの質問をすると、「上級レベルの文法をマスターしたい」、「日本語で専門語彙を覚えたい」、「漢字を500覚えたい」など、文法や語彙の知識量で目標を示す人がいます。また、「日本語で新聞が読めるようになりたい」、「日本語でメールが書けるようになりたい」、「日本人とおしゃべりできるようになりたい」など、言語スキルを示す人もいます。また、ただ漠然と「日本人のように日本語が使えるようになりたい」と言う人もいます。ここで言う「日本人」が誰を指すのかという議論も必要ですが、仮に「日本人」のモデルのような人が存在するとすれば、そこでの目標は「母語話者になること」であると言えるでしょう。

1980年代の外国語教育では、コミュニカティブ・アプローチという教授法が全盛でした。この教授法ではコミュニケーション能力の育成、つまり目標言語のスキルや運用力を高めることが外国語学習の目標とされました。それまでの外国語教育では文法や語彙などの言語体系の知識獲得が重視されていたので、そこに言語運用の適切さに関する知識をも含んだコミュニカティブ・アプローチはとても画期的なものでした。このアプローチが基盤とする言語能力観は「コ

コミュニカティブ・コンピテンス (Canale & Swain1980)³」と呼ばれます。コミュニカティブ・コンピテンスは、「文法能力」、「社会言語能力」、「談話能力」、「ストラテジー能力」という4つの下位能力に分類されます。一つ目の「文法能力」というのは、言語を文法的に正しく理解し使用する能力で、文法、語彙、発音、文字・表記が正確であることに焦点が当てられています。二つ目の「社会言語能力」というのは、相手との関係や場面に応じて、いろいろなルールを守って言語を適切に使用する能力で、相手や場面によって適切なスピーチスタイルや話題、非言語行動を選択することに焦点が当てられています。日本語の場合、友達とおしゃべりするときと、知らない大人に話しかけるときでは、例えば文末の表現が変わります。また「知らない人」と言っても、それが子どもの場合だったら「です・ます体」ではなく普通体を使うでしょう。三つ目の「談話能力」というのは談話を管理し、組み立てることができる能力で、会話の開始、継続、終了のしかた、あいづちの打ち方、話題の転換や展開のしかた、発話の順番とりの適切さに焦点が当てられています。例えば、日本語はあいづちが多い言語だと言われますが、どのタイミングでどのような言語形式のあいづちを使うかには適切さのルールがあります。四つ目の「ストラテジー能力」というのはコミュニケーションがうまくいかなかったときに、自分や相手の発話をコントロールして修復する能力です。例えば、ある単語が分からないとき、別の言葉で言い換えたり、例を出して説明したりします。また外国語の場合には、分からない単語を母語で伝えたり、聞き手に助けを求めたりするでしょう。このように、私たちは様々な観点から言語使用の正確さや適切さをモニターし、意識的、無意識的に言語形式やスキルを操作しています。この考えのもとでは、言語能力というのは外から個人の中に蓄積されていくもので、一度獲得してしまえば様々な状況に適用可能だと考えられています。そして、その普遍的な正確さと適切さは「母語話者」の言語使用が規範となっています。つまり、目標言語の母語話者のような言語使用の普遍的な正確さと適切さを身につけることが外国語学習の目的であり、目標であるという考え方は現在でも外国語学習の主流となっています。

2-2. 異文化間的側面を重視した外国語学習

一方、1990年代に入り、コミュニカティブ・コンピテンスとは異なる観点で外国語学習の目的や目標をとらえる必要性も指摘し始められました。

³ Canale, M. & M. Swain (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1/1, 1-47.

例えば、欧州ではその政治的背景から、複言語主義、つまり、一人の人間は性質やレベルにばらつきがある複数の言語や言語変種のレパートリーを充実させるべきだという考えが生まれ、その考えのもと、外国語教育の目標は異なる文化背景をもつ相手とのインターアクション（やりとり）を通じた他者理解であるとされました。そして、その過程で自己を再認識すること (Kramsch 1993)⁴が言語教育において重要だと認識されるようになっていきます。ここでは、外国語学習の目標は、従来のように目標言語（日本語教育の場合は日本語）の母語話者をモデルとした言語規範（文法や語彙の知識やスキル）の獲得でなく、目標言語を学ぶ理由や目的、既に自分の中にある複数言語の能力を意識し、学習過程でそれを活用する力を身につけることとなります。さらに、複言語の社会をしっかりとイメージした上で、他者の言語に固有の文化、他者の文化的アイデンティティを尊重する態度を身につけることも重要です。つまり、ここでの目標は「母語話者になること」ではなく、自分の言語レパートリーを広げ、言語や文化の違いを超えて相互に理解しあうことということになります。

Byram(1997)⁵はこの異文化間的な能力を「異文化間コミュニケーション能力 (Intercultural Communicative Competence)」としてモデル化し、「異文化間コミュニケーション能力」の核を、それまでのコミュニカティブ・コンピテンスに対応する言語の知識やスキルではなく、「異文化間能力 (Intercultural competence)」であると考えました。Byram のモデルによると、「異文化間能力」は「知識」、「解釈と関連付けるスキル」、「批判的文化アウェアネス」、「発見しインタラクションするスキル」、「態度」という5つの要素から構成されています。そして特に、言語や文化の多様性に対する好奇心と敬意、他者に対する寛容と関係性の構築、さらに自己変革といった「態度」が「異文化間能力」の基盤になるとしました (Byram et al. 2002)⁶。つまり、異文化間的側面を重視した外国語学習では、自分自身の持つ知識や認識を変化させることを前提とした「態度」を身につけること、外国語学習を通して起こる「自己変容」が目的であり、目標だとも言えます。

⁴ Kramsch, C. (1993). *Context and culture in language education*. Oxford: Oxford University Press.

⁵ Byram.M (1997) Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. MULTILINGUAL MATTERS.

⁶ Byram.M. Gribkova B. and Starkey H. (2002) Developing the Intercultural Dimension in Language Teaching –A Practical Introduction For Teachers-. Council of Europe

3. 日本語学習者 A の日本語学習の場合

ここに1年間の交換留学生として日本に来た大学生のAさんが、日本での留学プログラムの総括として書いたレポート(抜粋)⁷を取り上げ、普遍的な言語規範の獲得を重視した外国語学習の観点と、異文化間的側面を重視した外国語学習の観点から、Aさんの日本語学習について考えてみましょう。

Aさんは米国出身で、日本のアニメがきっかけで日本文化や日本語に興味を持ちはじめました。日本の大学に留学してから日本語を本格的に学び始め、このレポートは日本語学習開始8ヵ月後に書きました。

夢

いつか一年間日本で留学をしたり、友だちができたり、10年前の私に言ったらそのことを信じられなかったと思いました。私は強硬で、反社会てきだったから。そして、その前に、友だちがいなかったです。(略)

でも、中学校生の時、アニメを見始めました。(略)ナルトと言うアニメを見始めました。毎週土曜日に見ました。いちばん好きなキャラクターはハタケ・カカシでした。それから、そのキャラクターの絵を描き始めました。毎日がんばりましたから、たくさん絵を描くために本と漫画を買いました。その本を読んだ時、もっともっと日本について習いました。そろそろ夢を作りました。その新しい夢は日本に行くことでした。(略)その時は13歳でしたから、だれも信じませんでした。そこで、それを聞いたら、私の夢は強くなりました。高校で、その夢もありました。大学生になりたかったです。お金がなかったから、仕事をしたかったです。いい仕事をしたかったから、大学生になりたかったです。だから、高校生の時、毎日勉強がんばりました。そして、ある日に、私はいつも一人ときびきました。いつもさまざまな人を見ました。さまざまな人の生活について、面白いと思ったから、心理学的な仕組みを考えました。毎日、考えたから、新しい夢を作りました。その新しい夢は、大学で心理学を勉強することでした。(略)毎日、大学図書館で6時間勉強しました。晩ご飯だけ食べました。ある日、晩ご飯の時、私のルームメートはドイツ人の留学生と台湾人の留学生をしようかいました。(略)もういちど私の夢が変更しました。でも、新しい夢を作りました。新しい夢は全世界を旅行したかったです。いちばん初めの国は日本でした。だから、もっと留学生のことを習いました。後に留学申し込みをしました。

2ヶ月後にメールをくれました。そのメールは日本の留学としてうけつけました。その時、私は信じませんでしたから、私の友だちに言いました。言ったから、私の友だちは信じました。だから、私も信じました。

⁷ 『奈良教育大学 日本語・日本文化研修留学生／国際交流協定に基づく特別聴講学生 修了レポート集』第14号, 147-149。表記等は原文のママ。

日本に来た時、ぜんぜん日本語が分かりませんでした。でも今から、友だちのおかげで、私の日本語が良くなりました。それだけじゃなくて、私の友だちから、もっとならいました。カヤさんとトゥリーさんはファッションを分かることおしえてくれました。日本でふくはとても小さいから、カヤさんとトゥリーさんは大きなサイズをみつけてくれました。(略)次は、ショウさん。せかいに、じぶんのためではなくて、しんせつな人がいるとおしえてくれました。(略)アンドレアさんは自分にすなおになることおしえてくれました。たとえば、友だちがアドバイスがいる時に、アンドレアさんはいつもすなおのアドバイスを与えます。ナデインさんは人が多いところに、さびしく感じる時、友好が重要とおしえてくれました。最終の人はエルザさんです。エルザさんといっしょに話した時、彼女は大学に入る前に何を勉強したかったとぜんぜんわからなかったと言いました。でも、エルザさんは日本語を勉強し始めた時、もっと日本語を好きになりました。エルザさんは、ねつじょうの人もあるとおしえてくれました。エルザさんは、日本語を話す時、いつも目の中に本当のねつじょうが見えます。エルザさんは日本語を話すのがとても好きですから。だから、私はそのねつじょうてきな人になりたいと言いました。

最後に日本に行ったから、私はとてもうれしいと思います。たくさんけいけんのおかげでいろいろ習いました。友だちはもっとおしえてくれたから、今、私は自分のことがもっと好きになりました。どんどん私はなりたかった人になるためのほうほうをいつか習うだろうと思います。たぶん、ある日は、自分のことをぜんぶが好きになれると思います。

このレポートから A さんの日本語学習はどのように捉えられるでしょうか。

まず、普遍的な言語規範の獲得を重視した外国語学習の観点から考えてみましょう。

コミュニケーション・コンピテンスの文法能力の観点から見ると、レポート中の日本語には文法の間違いや語彙選択の不自然さが見られます。例えば、2 行目の「私は強硬で、反社会てきだったから。」の部分では「強硬」という語彙の選択に不自然さを感じます。「強硬」という言葉は「自分の立場・主張を強い態度であくまでも押し通そうとすること(広辞苑)」という意味であり、人の性格を表すのには使用されません。おそらく「強情」や「頑固」という言葉のほうがぴったり来るでしょう。また談話能力という観点から見ると、レポートでは短い文(単文)や同じパターンの複文が多用されているため、稚拙な印象を受けます。例えば、「お金がなかったから、仕事をしたかったです。いい仕事をしたかったから、大学生になりたかったです。お金がなかったから、仕事をしたかったです。いい仕事をしたかったから、大学生になりたかったです。～」の部分は<理由>を現す従属節「から」が多用され、列挙されています。また内容の重複する部分もあります。このように日本語の言語形式の正確さといった

言語スキルの観点からは、Aさんのレポートは修正すべき点があり、初級修了レベルだと捉えられます。

次に異文化間的側面を重視した外国語学習の観点から考えてみましょう。

レポートには、Aさんの夢が日本語（日本）との関わりを軸に、どのように変化していったかが書かれています。日本留学で出会った友人から学んだ多くのことを記述した部分からは、彼女が自らの言語レパトリーに日本語を加えていく過程で、多様な言語・文化背景を持つ他者に対する関心と敬意をもってコミュニケーションに参加し触れ合おうとしている姿が読み取れます。また、複言語・複文化的なインターアクション（やりとり）の中で、平等な関係を築こうとする意志も見られます。さらに、他の文化／言語を背景とする人々からの助けを受け入れ、そこから自己を変容させています。

また日本文化という他文化に出会ってから日本に留学するまでを記述した部分からは、Aさんが内省的に自身の日本語学習を管理し、学習のニーズや目標をはっきりと定めることができる自律的な学習者であることがわかります。これらの点から考えると、Aさんは日本語や日本文化と出会い、学習を進めていく中で、しっかりと自己を変容させていると言えます。

4. おわりに

近年、「グローバル社会」や「グローバル人材」という言葉がいろいろなところで聞かれます。これらの言葉は外国語能力の有無とセットにして語られることも多いように思います。そこには「外国語（多くの場合、それは英語を指していますが…）を使って世界で活躍できること」といったイメージもあるようです。しかし「世界」とはどこを指すのか、「活躍できる」というのは何を意味するのか、よく考える必要があります。世界を股にかけ英語を使って交渉ごとをこなすビジネスパーソンにならなくても、外国語を学ぶ意味はあるでしょう。その意味は人によって違うはずです。

最後にもう一度あなたに問いかけます。あなたは何のために外国語を学んでいますか。日本語を学ぶAさんの自己変容の姿は、外国語を学ぶ意味を問い直すきっかけを与えてくれます。外国語を学ぶことで、どのような自分になりたいのか、外国語学習を学ぶ、その意味を見据えることは、Aさんのように「なりたい自分」になる方法を見つける一つの方策になるのではないのでしょうか。

和泉元 千春 (Chiharu Izumimoto)

1997年 大阪外国語大学大学院 外国語学研究科 修了
(言語・文化修士)

1999年 国際交流基金関西国際センター 日本語教育専門
員を経て、2011年 奈良教育大学 准教授。



【研究テーマ】

日本語を母語としない人たちへの日本語教育の実践と研究を行っています。特に言語文化教育における自律学習支援を目指したプログラムデザイン、異文化間能力の育成と、そこでの教師の役割に興味があります。また、日本語学習者の口頭表現能力の養成と評価にも関心があり、教材開発も行ってきました。

【著者の自己紹介】

—今の研究分野を選択したきっかけ

高校時代に「日本語教師」という仕事の存在を初めて知り、ぼんやりと憧れの気持ちを持っていました。大学を卒業するときになってこの夢を思い出し、大学院で日本語教育学を学ぶことにしました。

—休日の過ごし方

子どもと過ごす時間を大切にしています。子どもや子どもを通して接する社会は、私にとって身近な「異文化」です。同じ日本語を話していても個人の中にある「文化」は異なっているということを実感します。

外国語を学ぶことの意味

—日本語学習者の学びから—

著者 いずみもと ちはる
和泉元 千春

2017年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>